

高等学校英語科における非認知能力の育成

— PBL型授業の単元計画作成とAARサイクルの授業展開 —

高校教育研究係
長期研修員 儘田 憲子

《研究の概要》

本研究は、高等学校英語科において、PBL型授業にAARサイクル（見通し・活動・振り返り）を取り入れた単元展開が、生徒の非認知能力の育成に有効であるかを明らかにすることを目的とした。目的・場面・状況を明確にしたプロジェクトを設定し、AARサイクルを単元全体に位置付けた授業実践を行った結果、生徒が振り返りを基に学習を調整し、プロジェクト遂行に向け、主体的に学習に取り組む姿が確認された。また、教員間で事前に非認知能力が伸長する場面を想定し、単元計画を共同作成した上で授業実践を行ったことで、生徒の学習過程における非認知能力の育成を捉える視点がより明確になった。その結果、PBL型授業にAARサイクルを取り入れた単元設計の有効性が明らかになった。

キーワード 【後期中等教育・高等学校 非認知能力 PBL型授業 AARサイクル】

群馬県総合教育センター
分類記号：H03-03 令和7年度 288集

I はじめに

非認知能力とは、学力テストや知能指数（IQ）といった従来のペーパーテストによって数値化される認知能力とは対照的に、個人の内面的な資質や社会的な適応力を指す概念とされる。ヘックマン（2015）によれば、根気強さ、意欲、自信、他者との協働といった社会的・情動的性質がこれに含まれる。

非認知能力については、現代社会における、個人の幸福（ウェルビーイング）や社会的な成功と強く相関していることから、その必要性が盛んに論じられている。テクノロジーの急速な進展により情報が目まぐるしく更新される予測困難な時代においては、既存の知識やスキルのみでは変化に柔軟に対応することが困難となっている。OECD（経済協力開発機構）の「Education 2030」プロジェクトにおいては、創造性や問題解決能力、他者と協働する力といった非認知能力が、21世紀を生き抜くための不可欠な基盤であると指摘されており、学校教育においても、知識の伝達だけではなく、主体的に学び続ける力や、他者と協力しながら問題を解決する力を育むことが求められている。群馬県においても、令和5年度から取り組んでいる「非認知能力の評価・育成事業」の一環として、SAH（Student Agency High school）指定校・協力校において、「自ら考え、判断し、行動できる生徒」の育成に向けた実践研究を進めている。さらに、令和6年3月に策定された「群馬県教育ビジョン（第4期群馬県教育振興基本計画）」では、最上位目標として「自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて 一ひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける『自律した学習者』の育成」を掲げ、自らの意思と選択で自らの学びを構築し、行動に移すことができる生徒の育成を目指している。

このような背景を踏まえ、高校教育研究係では、昨年度より「非認知能力の育成に焦点を当てた学校教育の改善」を研究主題としている。本年度の研究に当たり、まず検討したことは、学校教育における非認知能力の位置付けについてである。非認知能力として先に挙げた能力や、自制心、チャレンジ精神、規範意識、共感性、コミュニケーション能力といった資質・能力や心構えは、「人格の完成」を目的に掲げる日本の学校教育においては長年重視されてきたものであり、決して真新しい概念ではない。しかしながら、多様な教育活動のどの局面において、どのような働き掛けが、どのような能力育成に寄与するのかという観点からの検討は必ずしも十分でなく、言わば「重要ではあるが実体の捉えにくい能力」として、無意識的・経験的に育成が目指されてきた側面が強い。このような現状を踏まえ、本年度の研究においては、「教育活動の具体的な場面において、非認知能力に意識が向かう効果的な仕掛けを構築すること」を、本年度の3名の長期研修員（高等学校教諭2名、小学校教諭1名）に共通する研究の方向性に据え、その意識的・分析的な育成の方法を研究した。

長期研修員による個別の研究内容として、まず、義務籍の長期研修員については、「小学校高学年における学校行事等を通じた非認知能力の育成 ―ポートフォリオシートの開発と活用―」と題して、特別活動（特に学校行事）の運営に着目した研究を展開した。独自に開発したポートフォリオシート「こころの力のばシート」を複数の学校行事にわたって継続的に活用することで、児童が自身の能力や、その伸長を自覚できるような指導の在り方を提示した。

次に、高校籍の2名の長期研修員については、教科指導場面に着目し「深い学び」に向けた授業改善の視点から研究を進めた。うち1名は、「高等学校数学科における非認知能力の育成 ―過程を重視する「探究的な学び」の実現を目指した授業実践―」をテーマに据えた。非認知能力と親和性の高い「学びに向かう力、人間性等」の育成に着目し、探究的な学習プロセスを通じて、生徒が数学を学ぶ価値を再発見する仕掛けを構築した。もう1名は、「高等学校英語科における非認知能力の育成 ―PBL型授業の単元計画作成とAARサイクルの授業展開―」と題した研究を行った。自校の魅力を英語で発信するプレゼンテーション動画の作成等のPBL（Project Based Learning）型授業に、「見通し・活動・振り返り」のサイクルを組み込むことで、生徒に自己調整や試行錯誤、他者との協働を促した。

係としての研究を推進するに当たって深い検討を要した点を二点挙げる。一点目は、非認知能力の構造をどのように捉えるかという問題である。非認知能力は、心理学及び教育学の領域において広範に議論されているが、その定義は研究者や研究機関によって多岐にわたる。特に、認知能力との境界設定や、

非認知能力に内包される要素の関連や区分については、統一的な見解がないのが現状である。そこで、先行研究の精査を重ねた上で、義務籍の長期研修員は、中山(2023)の知見を、高等学校籍の長期研修員は、遠藤¹⁾による分類(表1)を土台として研究を推進した。それぞれの教育現場や研究の場面の特質に応じた分類を採用することで、概念の曖昧さを回避し、実践における指導と評価の指標が明確になるように図った。

表1 遠藤による非認知能力の分類(一部を抜粋)

自己に関わる心 の力	「自尊心」「自己肯定感」	自分を愛し自分の性質や能力に自信を持つ
	「自己効力感」	やればできるはずという感覚
	「好奇心」「意欲」	おもしろいことだったらもっとやってみたいと思える力
	「グリット」	目標に向かって我慢強くやり抜く力
	「自己理解」	自分自身の特徴や状態などをちゃんと認識できる力
社会性に関わる心 の力	「自律性」「自立心」	自分の頭で考え自分の意志で決めて自分の力で行動しようとする力
	「心の理解能力」	他の人の心の状態を適切に理解するための力
	「コミュニケーションをとる力」	心の理解を基に他の人と適切にコミュニケーションできる力
	「協調性」「協同性」	他の人と助け合いながら事を進めていく力

二点目として、非認知能力が各教科の指導場面で育成を目指す資質・能力とどのように関連付けられるのか、という点が挙げられる。教科指導においては、当然ながら各教科固有の知識及び技能、すなわち認知的な指導事項の習得を目的とする。そのため、指導内容の充実と非認知能力の育成を両輪として機能させることを意識した。

あわせて、本研究においては、非認知能力を「学びに向かう力、人間性等」と極めて親和性の高い概念であると位置付けている。「学びに向かう力、人間性等」については、現行の『学習指導要領(平成29,30年告示)解説総則編』²⁾の中で、以下のように述べられている。

主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要となる。これらは、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含むものである。また、多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するものも幅広く含まれる。

主体的に学習に取り組む態度、メタ認知、協働する力等、ここに挙げられている力や態度、人間性の多くは非認知能力の側面から捉え直すことができるものである。更に踏み込んで考察すれば、「学びに向かう力、人間性等」は、「児童(生徒)がよりよい社会を築き、自らの人生を切り拓いていくため」の力とされている。これは、非認知能力がもつ、個人の幸福や社会的な成功に寄与するという性質と深く合致するものである。

さらに、非認知能力と「学びに向かう力、人間性等」との相関について深く検証するために、遠藤による非認知能力の分類と、令和7年9月の中央教育審議会教育課程企画特別部会『論点整理』³⁾で示された、次期学習指導要領改訂における「学びに向かう力、人間性等の今後の整理イメージ」³⁾の照合を行った。この整理イメージは、現行の「学びに向かう力、人間性等」の基本的な概念を

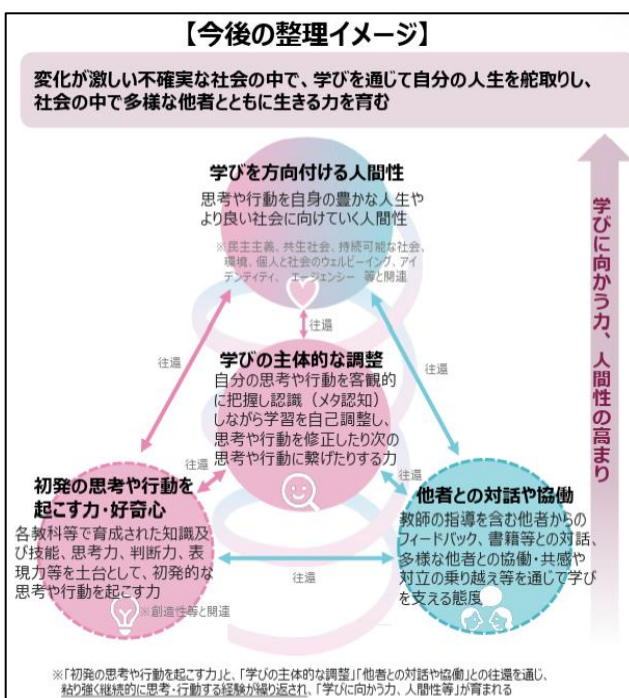


図1 学びに向かう力、人間性等の今後の整理イメージ

¹⁾ 遠藤利彦(2022) 「「非認知能力」なるものの発達と教育」『発達』 170号 pp.2-8 ミネルヴァ書房

²⁾ 文部科学省(2017・2018) 『学習指導要領解説総則編』 (平成29年・30年告示)

³⁾ 中央教育審議会(2025) 『論点整理』 学びに向かう力、人間性等の今後の整理イメージ(令和7年9月)

残しつつ、主要な要素や要素間の関係を構造化して、より分かりやすく再整理したものとされる。(前ページ図1)

具体的な対応を詳述すれば、遠藤の分類における、「好奇心・意欲」、「自己効力感」、「自尊心・自己肯定感」といった非認知能力は、前ページ図1左下の「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」と通じる資質・能力であり、「自己理解」、「自律性・自立心」は、中央の「学びの主体的な調整」と、自身の思考を客観視するメタ認知や行動の自己決定を要する点で通底する。加えて、右下の「他者との対話や協働」は、遠藤の説く、「心の理解能力」や「協調性・協同性」、「コミュニケーションをとる力」の発現そのものである。更に言えば、遠藤が「目標に向かって我慢強くやり抜く力」とする「グリット」は、前ページ図1中央の螺旋状の矢印と結び付くものである。この矢印は、先に示した三要素を往還し、粘り強く継続的に思考・行動する経験を繰り返すことで、最上位の概念である「学びを方向付ける人間性」へと結実する構造を表したものであり、「グリット」と通じる概念であると解釈できる。

このような考察に基づき、本研究においては、教科指導において「学びに向かう力、人間性等」の育成を意図することは、それと対応する非認知能力の育成を促すこととほぼ同義であるとした。その上で、これらの能力が顕在化しやすい場面を意図的に設定するとともに、見取りや称賛、評価をすることを通じて、生徒が自身に備わった非認知能力を自覚したり、それを伸長したりすることを試みた。

以上、研究の前提として、非認知能力の捉え方について概観した。非認知能力を学校教育の諸活動において意図的・計画的に育成する試みは、未だ道半ばである。次章以降に詳述される長期研修員による具体的な研究成果が、非認知能力育成の充実に向けた一歩となることを強く期待する。

II 研究の背景

1 高等学校英語科の言語活動等の実態について

高等学校学習指導要領外国語科の目標では、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」³の育成が示されている。その達成に向けては、目的や場面、状況などを明確にした言語活動を設定し、生徒が実際に英語を使用する必然性のあるコミュニケーション活動を行うことが主眼となる。

しかし、実際の授業においては、教科書の題材を生徒の生活や実体験と結び付け、身近なテーマを基にした言語活動として具体化することが難しい場合も少なくない。その結果、題材との関連性が十分ではない言語活動が設定され、活動が形式的なものにとどまってしまう場面が見られる。また、題材自体は適切であっても、それを生徒の実体験に即した言語活動として提示するためには、目的・場面・状況を踏まえた活動を構想する教員の発想力や授業デザイン力が求められる。

こうした言語活動の設定は教員個人の裁量に委ねられている部分が大きく、同一学年の担当者間であっても指導の重点やアプローチに差が生じ、組織的な共通理解（以下、目線合わせ）が十分に行われていないのが現状である。さらに、限られた授業時数の中では言語活動に十分な時間を確保することが難しく、結果として教科書の内容理解にとどまる授業にならざるを得ないという課題もある。

2 非認知能力の捉え方

研究協力校（以下、協力校）では、「五常の教え」という価値観を様々な教育活動を通して育成することを目指している。「五常の教え」とは、「仁・義・礼・智・信」という五つの徳目を柱とし、人としての在り方や行動の指針を示す考え方である。この考え方は、前ページ表1に示した遠藤(2022)の非認知能力の分類と概念的な対応関係が見られる。本研究では、「五常の教え」と遠藤の分類を関連付けることで、教科指導において育成を目指す「学びに向かう力、人間性等」を、非認知能力として位置付けることとする。

³ 文部科学省(2018) 高等学校学習指導要領(平成30年告示) 外国語編

Ⅲ 研究のねらい

高等学校英語科の学習指導において、PBL型授業にAARサイクルを取り入れた単元展開が、情報や考えなどを的確に理解し、適切に表現し、相手と伝え合うコミュニケーションを図る力の育成とともに生徒の非認知能力の育成に有効であることを明らかにする。

Ⅳ 研究における基本的な考え方

1 研究の概要

本研究では、生徒の非認知能力の育成を目的として、PBL型授業におけるプロジェクトを遂行する学習過程の中に、AARサイクル（見通し・活動・振り返り）を取り入れた単元計画を作成・実践した。PBL型授業にAARサイクルを取り入れることで、生徒が学習の各段階で見通しをもち、活動を振り返りながら次の行動を調整する学習過程を繰り返し、非認知能力を伸ばしつつ学びを深めていく授業展開が可能になると考えた。

2 文言の定義

(1) 「プロジェクト」とは

プロジェクトとは、PBL型授業において中核となる言語活動のことを指す。単元の題材に基づいたプロジェクトを設定し、生徒が自分事として協働的な活動と成果物の作成・発表・共有を通して、その達成を目指していく。なお、本研究においては、「オープンスクールに来校する中学生と保護者に、研究協力校の魅力を伝えるために動画を作成しよう」及び「みんなが学校生活をさらに快適に過ごせるように研究協力校を改善する提案をしよう~Innovation Awards in 研究協力校~」の二つをプロジェクトとして設定した。

(2) 「PBL型授業の単元計画」とは

PBL型授業の単元計画とは、単元の題材に即したプロジェクトを設定し、その達成に向けて生徒が主体的に学習に取り組むことで、必要な情報を自ら収集・分析しながら、ペアやグループで協働的に考察・検討・共有を行い、成果物の作成や発表を通して、単元の題材に関する理解と学びを深めていく単元展開を計画することを指す。このような単元計画により、生徒はプロジェクトを自分事として捉え、試行錯誤を重ねながら主体的に成果物を作成し、その発表に至ることができる。中山(2023)⁴は、「学習者が問題を自分のものとして捉え、当事者意識をもって課題に取り組むことがPBLの前提条件である」と述べている。PBL型授業では、実社会や身近な課題を基にしたプロジェクトを設定することを通して、生徒が主体的に思考し、必要な知識や英語科の目標である資質・能力の育成と様々な非認知能力の育成が期待される。

(3) 「AARサイクル」とは

AARサイクルとは、「見通し(Anticipation)・活動(Action)・振り返り(Reflection)」の三つのプロセスを繰り返すことで、学びを深めていく学習の流れである。PBL型授業が十分に機能するためには、生徒が学習の見通しをもってプロジェクトに取り組み、学習過程を振り返りながら自らの学びを調整していくことが重要である。そこで本研究では、PBL型授業の学習過程を支える枠組みとしてAARサイクルを位置付けた。生徒は、プロジェクトに主体的に取り組む中で、このサイクルを意識的に活用することで自らの学びを調整し、改善するとともに様々な非認知能力も発揮することができると思う。

⁴ 中山芳一(2023) 『教師のための「非認知能力」の育て方』 明治図書

V 授業実践①

1 授業実践に向けた準備

PBL型授業の単元計画を構想するにあたり、まず単元の題材に即したプロジェクトの設定を行った。本単元では、若者が社会課題に対して当事者として行動することの重要性を訴える教科書本文の内容を踏まえ、「近日開催予定のオープンスクールに、自分たちが携わる場面をもっと増やしたらどうか」という問いを生徒に投げかけ、題材を自分事として捉えることができたようにした。

その上で、「オープンスクールに来校する中学生と保護者に、研究協力校の魅力を伝えるために動画を作成しよう」というプロジェクトを設定し、実際の相手と目的を意識して英語を使用する必然性をもたせた単元計画を構想した。

単元展開においては、プロジェクトの達成に向けて、生徒が見通しをもって主体的に学習に取り組み、必要な情報を収集・整理しながら、ペアやグループで協働的に検討する学習過程を重視した。また、動画作成と発表を通して、題材理解を深めるとともに、既習の英語の知識や技能を活用する機会を設定した。

なお、毎時間の授業においてワークシートに「見通し」「活動」「振り返り」を設け、生徒が学習過程を言語化することで、AARサイクルが可視化されるよう工夫した(図2)。

考える・予想する・計画する		読む・調べる・練習する・交流する	確認する・修正する
	見通す場面	活動する場面	振り返る場面
1 ()			
2 ()			
3 ()			
4 ()			

単元の振り返り

五常の教え

- 仁：思いやりの心
- 義：不正を憎む心
- 礼：他人を敬う心
- 智：善悪を判断する心
- 信：誠実な心

図2 ワークシート

2 授業計画

(1) 概要

対象	研究協力校 高等学校第1学年 200名 (5学級)
実践期間	令和7年9月4日～9月12日 4時間
単元名	「Toward Sustainable Development Goals」
プロジェクト	「オープンスクールに来校する中学生と保護者に、研究協力校の魅力を伝えるために動画を作成しよう」
単元の目標	聞き手に自分の考えをよく理解してもらえるように、「オープンスクールに来校する中学生と保護者に、研究協力校の魅力を伝えるために動画を作成しよう」というプロジェクトについての情報や考えを、聞いたり読んだりしたことを基に、理由とともに話して伝えることができる。

(2) 検証計画

検証の観点	検証方法
PBL型授業にAARサイクルを取り入れた単元展開によって、生徒の非認知能力に変容が見られたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒のワークシートの分析 ・学習活動の観察 ・非認知能力アンケートの事前・事後比較

(3) 指導計画

時間	学習活動	観点	評価方法
1	単元の主題に関する教師のオーラルイントロダクションを聞き、理解する。 本文内容を理解する。 単元のプロジェクトを理解する。	知・態	本文内容を理解している。 ＜ワークシート(知)＞ 身近な話題について、聞き手にとって関心のある内容を発信するという課題を捉え、自分の考えをもととしている。 ＜観察(態)＞

2	本文を読むことで得た知識や情報を基にリテリングを行う。 発表準備を行う。 ペアで発表練習を行う。	思	ペアでの発表練習を通して、聞き手にとって関心がある内容や伝え方を検討している。 ＜ワークシート（思）＞
3	動画撮影の前にペアで修正と発表練習を行う。 動画撮影を行う。	知・思	「オープンスクールに来校する中学生と保護者に研究協力校の魅力を伝えるために動画を作成しよう」というプロジェクトについて、聞き手にとって関心がある内容や伝え方を工夫して話している。 ＜動画（知・思）＞
4	撮影した動画を鑑賞する。 振り返る。	思・態	動画を互いに鑑賞し、よさや次回につなげるアドバイスをしようとしている。 ＜観察・ワークシート（思・態）＞

3 結果

(1) 授業の実際（3時間目（原稿修正・発表練習）の様子）

本時は、プロジェクト遂行に向けた原稿修正と発表練習を中心に授業を実施した。授業冒頭は、ペアでの発表練習を行い、相手に伝える活動を設定した。その際、生徒は互いの発表を聞き合い、表現や発音について助言し合う姿が見られた。また、自身の発表を振り返り、課題点をワークシートに記述する様子も確認された。これらの行動から、「自己理解」と「コミュニケーションをとる力」、「心の理解能力」といった非認知能力が向上していたと捉えることができる。

次に、生徒は進捗状況を踏まえながら原稿の修正や加筆、撮影・録音のやり直しに取り組んだ。活動中には、自ら改善点を見付け、どの部分を修正するかを主体的に判断し、作業内容を調整する姿が見られた。このような様子から、非認知能力における「自律性・自立心」や「自己効力感」が高まっていたと考えられる。また、納得のいく表現や動画が撮れるまで複数回試行と修正を重ねる姿も見られ、粘り強く取り組む姿、「グリット」といった非認知能力の強化がうかがえた。

さらに、AARサイクルに基づき、前ページ図2のような「見通し・活動・振り返り」の記述では、多くの生徒が本時の課題や次時への改善点を具体的に言語化していた。これらの記述から、生徒が自身の学習過程を振り返り、次の行動を調整しようとする自己調整の様子も見られた。

(2) 授業の実際（4時間目（鑑賞会）の様子）

本時は、図3のような動画の相互鑑賞と段階的な修正活動を中心に授業を実施した。鑑賞活動では、生徒同士が互いの動画を視聴し、内容や表現について質問を行う姿が見られた。生徒は、相手の意図や工夫点を踏まえて質問や意見を述べており、対話を通して「コミュニケーションをとる力」や「心の理解能力」といった非認知能力が向上していたと捉えられる。また、他者からの質問や指摘を受けて自分の動画を見直し、内容や表現を再度修正する姿が確認された。生徒は、音声や発音、話す速度、テロップ表現などの観点を意識しながら再鑑賞し、自ら改善点を見付け、修正内容を判断してその改善に取り組んでいた。このような様子から、非認知能力における「自己理解」の深まりや「自律性・自立心」が高まっていたと考えられる。



図3 鑑賞会での様子

動画を見直し、修正を重ねながら、よりよい表現、成果物を目指して試行錯誤する姿が多くの生徒に見られた。また他者の成果物から工夫点を取り入れようとする様子も確認され、粘り強く課題に取り組む態度や「自己効力感」の高まりがうかがえた。

4 考察

本実践では、「オープンスクールに来校する中学生と保護者に、研究協力校の魅力を伝えるために動画を作成しよう」というプロジェクトを設定し、PBL型授業にAARサイクルを取り入れた

単元展開を行った。その結果、生徒は成果物の完成を見据えながら学習過程を主体的に調整し、複数の非認知能力を発揮する姿を示した。

毎時間ワークシートに「見通し」「活動」「振り返り」を記入したことで、生徒は自身の学習状況や課題を把握し、次に取り組むべき行動を意識しながら学習を進めることができた。振り返りには、役割分担や内容構成の見直しに関する記述が多く見られ、「自己理解」を深めるとともに「自律性・自立心」を高める姿が確認された。これは、プロジェクトの達成を目的としたPBL型授業にAARサイクルを取り入れた単元展開が、生徒の自己調整を促した結果であると考えられる。また、改善を前提として活動を継続する姿からは、粘り強く課題に取り組む態度、すなわち「グリット」の強化がうかがえた。

さらに、生徒は伝える相手である中学生や保護者を意識し、英語表現や語彙、構成を工夫しており、「心の理解能力」の深まりや「コミュニケーションをとる力」が向上していた。このような活動を通して、目的や相手に応じて内容を選択・構成し、英語で表現する力が高まり、英語科において目標とする資質・能力の育成にもつながったと考えられる。原稿作成や動画撮影、編集の過程では、ペアで進捗を確認し合いながら修正を重ねる姿が見られ、「協調性・協同性」も顕在化していた。鑑賞会において他者の成果物を参考に改善点を見いだす姿からは、自己の成長を実感しながら学習に向かう「自己効力感」の形成も確認された。

一方で、教員間で非認知能力を捉える視点の共有が十分でなかった点、生徒が試行錯誤を重ねるための時間や場面を十分に確保できなかった点、教科書本文の内容理解段階においてAARサイクルを十分に位置付けられていなかった点が課題として明らかとなった。これらを踏まえ、次の実践では、授業設計段階から教員間の共通理解を図るためのツールとして「アイ・コンパス」を活用し、非認知能力の育成をより意図的に組み込んだ授業実践②へとつなげることにした。

VI 「アイ・コンパス」の開発

授業実践①での課題を受け、次の実践に向けては、PBL型授業におけるプロジェクトの設定、単元展開、AARサイクルの位置付け、ならびに非認知能力が伸長する学習場面を、単元計画作成の段階で整理し、教員間で事前に共有することが必要であると考えた。そこで、PBL型授業におけるプロジェクト設定と、AARサイクルを取り入れた単元計画の作成を支援するためのツールとして、「アイ・コンパス」を開発した。

「アイ・コンパス」は、単元計画作成において教員間の目線合わせ、学習の方向性を共有するためのツールである。名称には、生徒の学びを自分事(I)として捉えるための視点、教員同士が意図や情報(information)を共有するための視点、学習場面における生徒の姿を見取る(eye)ための視点を、コンパス(羅針盤)のように活用しながら単元を構想していくという意味を込めている。

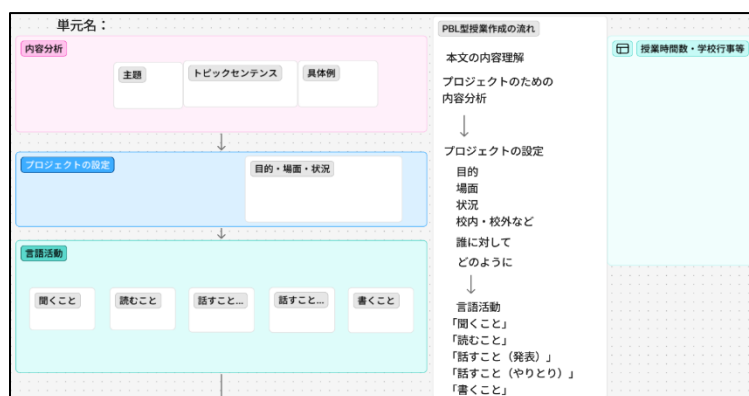


図4 「アイ・コンパス」

5	本文理解・言語活動(Scene 3・4)リテリング活動【役割】(コミュニケーションをとる力、自律性・自立心、心の理解能力)	AARサイクル(ペア)
6	serendipityに関することを書籍やICTを活用して個人で調べる。調べたことを用いて個人で、提案(提案テーマ)を考える。	AARサイクル(個人)
7	調べたことを用いて個人でテーマを考える。テーマごとにグループに分かれる。	AARサイクル(グループ)
8	グループで発表準備と発表練習を行う。グループで検討したことを振り返る。	AARサイクル(グループ)
9	中間発表会を行う。他のグループの発表を聞き、振り返る。	AARサイクル(グループ)
10	中間発表を振り返り、修正・発表練習を行う。(自律性・自立心、自己効力感、コミュニケーションをとる力)	AARサイクル(グループ)
11	グループで発表練習を行う。グループで検討したことを振り返る。	AARサイクル(グループ)
12	クラス発表会を行う。代表グループを選ぶ。振り返る。	AARサイクル(グループ)

図5 単元計画

「アイ・コンパス」は、教科書の内容を基盤としつつ、プロジェクトの設定、単元全体の構成、各授業におけるAARサイクルの流れを整理できるよう構成した(前ページ図4)。また、非認知能力の育成という観点から、どの学習場面でどのような生徒の姿を想定するかを可視化することで、教員間で共通理解を図ることを目的としている(前ページ図5)。さらに、ICTを活用することで、時間や場所を問わず意見やアイデアを共有しながら単元計画を作成・修正できる点も特徴である。

VII 授業実践②

1 授業実践に向けた準備

授業実践②に向けては、プロジェクトの設定及び単元計画作成の段階から「アイ・コンパス」を活用した。本単元では、「セレンディピティ」を題材とし、生徒が身近な学校生活の課題や改善の可能性に目を向け、主体的に考え続ける学習過程の実現をねらいとして、「みんなが学校生活をさらに快適に過ごせるように研究協力校を改善する提案をしよう~Innovation Awards in 研究協力校~」をプロジェクトとして設定した。

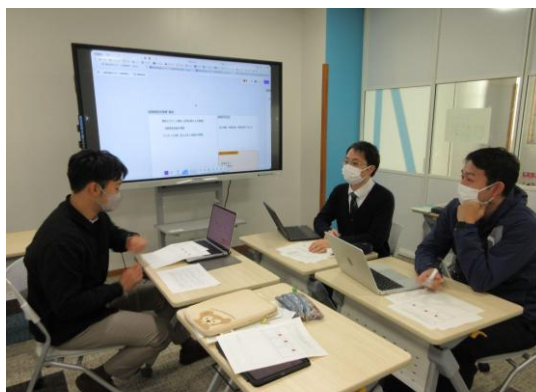


図6 「アイ・コンパス」を用いた打ち合わせ

プロジェクトの設定及び単元計画の検討にあたっては、協力校の教員と協働し、「アイ・コンパス」を用いて、英語を使用する目的・場面・状況や、AARサイクルを取り入れる学習場面、非認知能力の伸長が想定される場面を整理した(図6)。その結果、単元計画作成の段階で、生徒の学習過程をあらかじめ想定した上で、見通しをもった授業設計を行うことが可能となった。

2 授業計画

(1) 概要

対象	研究協力校 高等学校第1学年 200名(5学級)
実践期間	令和7年11月6日~12月11日 12時間
単元名	「Technology and Discoveries」
プロジェクト	「みんなが学校生活をさらに快適に過ごせるように研究協力校を改善する提案をしよう~Innovation Awards in 研究協力校~」
単元の目標	聞き手に自分の提案を理解し、納得してもらえるように、「学校生活をさらに快適に過ごせるように研究協力校を改善する提案をしよう」というプロジェクトについての情報や考えを、調べたり読んだりしたことを基に、理由とともに話して伝えることができる。

(2) 検証計画

検証の観点	検証方法
PBL型授業にAARサイクルを取り入れた単元展開によって、生徒の非認知能力に変容が見られたか。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のワークシートの分析 学習活動の観察 非認知能力アンケートの事前・事後比較

(3) 指導計画

時間	学習活動	観点	評価方法
1	単元の主題に関する教師のオーラルイントロダクションを聞き、理解する。 縮約本文による内容(セレンディピティ)を理解する。 単元のプロジェクトを理解する。	知	縮約本文の内容(セレンディピティ)を理解している。 ＜観察・ワークシート(知)＞

2	縮約版本文を読むことで得た知識や情報を基に言語活動を行う。(リテリング活動)	思・態	読むことで得た知識や情報を基にリテリング活動をしている。 ＜観察(思)・ワークシート(態)＞
3	本文内容を理解する。	知	本文の内容を理解している。 ＜観察・ワークシート(知)＞
4	本文内容を理解する。	知	本文の内容を理解している。 ＜観察・ワークシート(知)＞
5	本文を読むことで得た知識や情報を基に言語活動を行う。(役割のあるリテリング活動)	思・態	読むことで得た知識や情報を基に役割のあるリテリング活動をしている。 ＜観察(思)・ワークシート(態)＞
6	セレンディピティに関することを書籍やICTを活用して個人で調べる。 調べたことを用いて個人でテーマを考える。	思	書籍やICTを活用して情報を収集し、自分の提案に生かそうと検討している。 ＜観察・ワークシート(思)＞
7	調べたことを用いて個人でテーマを考える。 テーマごとにグループに分かれる。	思・態	「学校生活をさらに快適に過ごせるように研究協力校を改善する提案をしよう」というプロジェクトについて、グループで提案したい内容や伝え方について、検討している。 ＜観察・ワークシート(思・態)＞
8	グループで発表準備と発表練習を行う。 グループで検討したことを振り返る。	知・思	中間発表会に向けて、グループで発表準備や発表練習を行っている。 ＜観察・ワークシート(知・思)＞
9	中間発表会を行う。 他のグループの発表を聞き、振り返る。	思・態	「学校生活をさらに快適に過ごせるように研究協力校を改善する提案をしよう」というプロジェクトについて聞き手が理解できるように内容や伝え方を工夫して話している。 ＜観察・ワークシート(思・態)＞
10	中間発表会を振り返り、修正・発表練習を行う。	知・思	中間発表会を振り返り、グループで修正・発表練習をしている。 ＜観察・ワークシート(知・思)＞
11	グループで発表練習を行う。 グループで検討したことを振り返る。	知・思	クラス発表会に向けて、グループで発表練習を行っている。 ＜観察・ワークシート(知・思)＞
12	クラス発表会を行う。 クラスの代表グループを選ぶ。 振り返る。	思・態	「学校生活をさらに快適に過ごせるように研究協力校を改善する提案をしよう」というプロジェクトについて聞き手が理解できるように内容や伝え方を工夫して話している。 ＜観察・ワークシート(思・態)＞

3 結果

(1) 授業の実際(本文内容理解の部分でのAARサイクル不足解消の様子)

授業実践①では、教科書の本文内容理解は行われていたものの、その理解を基に判断や工夫を行いながら試行錯誤する活動の時間が十分に確保されていないという課題が見られた。そこで、授業実践②では、教科書本文の内容理解段階においてもAARサイクルが機能するよう、リテリング活動を中心に授業を実施した(図7)。リテリング活動とは、本文内容を理解した上で、相手に分かりやすく伝えるために情報を選択し再構成する活動を指す。本時は、この活動の流れを学習の見通しとして示した。単なる内容確認ではなく、判断と工夫を伴う言語活動として位置付けた。



図7 リテリング活動の様子

活動中には、限られた時間や情報量の中で、どの内容を優先して伝えるかを生徒自身が判断し、

構成を組み立てる姿が見られた。このような様子から、「自律性・自立心」が高まっていたと捉えることができる。また、聞き手を意識して表現や伝え方を調整する様子も確認され、「心の理解能力」の深まり及び「コミュニケーションをとる力」の向上が見られた。

活動の振り返りでは、理解の不十分であった点や伝え方の工夫について具体的に言語化している記述が多く見られ、本文内容理解の場面においてもAARサイクルを取り入れたことによる様々な非認知能力が向上している様子が確認された。

(2) 授業の実際（継続的な改善行動をする学びの姿の様子）

授業実践①では、生徒の発表準備から最終発表に至るまでの学習過程において、共有、検討、修正といった試行錯誤を継続的に行うための時間や場面が十分に確保されていないという課題が明らかになった。そこで本実践では、発表準備から最終発表に至る各段階において、AARサイクルを継続的に位置付けた単元展開を構想した。図2のようなワークシートを用いて学習の見通しや改善の段階を共有したことで、生徒は前時の振り返りを踏まえながら次の活動に取り組む姿を見せていた。

原稿作成、発表練習、中間発表、修正、リハーサルという段階的な学習過程を通して、生徒が自ら課題を見だし、修正や改善を繰り返す様子が多く見られた。中間発表会後には、他者からの助言や質問を基に、自分たちのグループの内容や表現を見直す様子が確認された。また、グループでの検討と改善を重ねる中で、協働しながら課題解決に取り組む様子が確認できた。

これらの学習活動を通して、試行錯誤を前提に改善を重ねながら学習を進める姿が見られ、継続的な改善行動をする学びの姿が現れるよう単元展開を計画することで、「自律性・自立心」、「自己効力感」、「コミュニケーションをとる力」等の非認知能力の向上がうかがえた。

(3) 「アイ・コンパス」を活用した授業設計の効果

授業実践②では、授業実践①において明らかとなった、非認知能力を捉える視点の共有不足、試行錯誤の時間・場面の不足、ならびに教科書本文の内容理解におけるAARサイクルの位置付けの不十分さといった課題を踏まえ、「アイ・コンパス」を用いて、プロジェクトの設定や単元全体の流れ、各授業におけるAARサイクルの位置付けを整理した上で授業を行った。その結果、教科担任へのインタビューを通して、「PBL型授業の全体像が把握しやすくなり、複数教員の意見を反映した共同かつ効率的な単元展開が可能になった」との評価が得られた。また「各学習段階において、生徒が見通しをもって活動に取り組み、振り返りを次の行動に活かそうとする姿が継続的に見られた」との意見も聞くことができた。

さらに、非認知能力が伸長する場面を事前に想定し、共有していたことから、「生徒の行動や学習過程に目を向ける意識が高まった」「共通認識のもと、生徒の行動や学習過程を承認することができた」との評価を得ることができた。

4 考察

授業実践②は、授業実践①で明らかとなった、教科書本文の内容理解段階におけるAARサイクルの不足、生徒が試行錯誤を重ねる時間や場面の不足、ならびに教員間で非認知能力を捉える視点が共有されていなかった点を改善することを目的として実施した。

まず、教科書本文の内容理解段階においてもAARサイクルを意図的に取り入れ、リテリング活動を通して「何を、どのように伝えるか」を生徒自身が調整する学習場面を設定した。その結果、生徒は本文内容を単に再話するのではなく、聞き手を意識して情報を取捨選択し、表現や構成を工夫する姿を示していた。振り返りには、「重要な点を選んで伝えようとした」「相手に伝わったかを意識して話すことで、本文の内容をより深く理解できた」といった記述が見られ、「自己理解」の深まりや「自律性」の高まりが確認された。これは内容理解を確認にとどめていた授業実践①と比べ、理解と表現を往還させる学習過程としてAARサイクルが機能した結果であると考えられる。

次に、発表準備から発表会に至るまでの各段階において、原稿作成、中間発表、修正、リハーサルを段階的に配置し、振り返りを基に改善を行う単元展開としたことで、生徒が改善を前提として

学習に取り組む姿が継続的に見られた。中間発表後の振り返りには、「時間が足りなかった」「説明が分かりにくかった」といった課題が示され、それを踏まえて役割分担や内容構成を見直す様子が確認された。このように、試行錯誤を前提とした学習過程を計画的に設定したことにより、「協調性・協同性」を基盤としながら粘り強く課題に取り組む態度、すなわち「グリット」の強化が促されたと考えられる。

さらに、単元計画作成の段階から「アイ・コンパス」を活用し、プロジェクトの設定意図、単元全体の見通し、AARサイクルの位置付け、非認知能力が伸長する学習場면을教員間で整理・共有したことにより、生徒の学習過程を捉える共通の視点が形成された。その結果、成果物の完成度のみならず、試行錯誤や協働の過程を非認知能力の伸長する場面として意図的に見取り、承認することが可能となった。

以上のことから、授業実践②では、PBL型授業にAARサイクルを単元全体に取り入れるとともに、試行錯誤を重ねる時間と場면을計画的に確保することで、生徒が自己の学習を調整しながら協働的に課題解決に取り組む学習過程が実現されたと考えられる。

VIII 検証 実態の変容（アンケート分析）

表2 事前・事後アンケートの変容

	質問項目	事前	事後	差
1	学習したことを次の活動のために振り返ることができた。（自己理解）	32.6%	39.0%	+6.4
2	一筋縄ではいかないような難しい問題に対しても取り組みつづけることができる。（グリット）	30.3%	33.8%	+3.5
3	誰もが納得できるような説明をすることができる。（グリット）	23.5%	29.9%	+6.4
4	社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関与したい。（自律性・自立心）	44.0%	52.6%	+8.6

授業実践①開始前の9月に実施した事前アンケートと、授業実践②及び学年発表会終了後の12月に実施した事後アンケートの結果を比較したところ、本研究の焦点であった「学習を振り返り、次の活動に生かそうとする姿勢」や「困難な課題に対して粘り強く取り組む態度」に関する項目において、数値の上昇が確認された(表2)。

本研究で用いたアンケートは、兵庫県立長田高等学校（以下、長田高校）において継続的に活用されている非認知能力に関する尺度であり、全187項目から構成され、すべて5段階評価（5：とてもあてはまる～1：全くあてはまらない）で回答する形式である。本検証では、生徒の肯定的な意識や態度の広がり把握するため、各項目について「4（あてはまる）」及び「5（とてもあてはまる）」と回答した割合を合算し、パーセンテージで示した数値を用いて分析を行った。学校現場の文脈に即して継続的に運用されてきた尺度であることから、生徒の意識や態度の変化を把握するための調査として適切であると判断し、採用した。

具体的には、「学習したことを次の活動のために振り返ることができた」とする「自己理解」に関わる項目において6.4ポイントの上昇、「一筋縄ではいかない難しい問題に対しても取り組みつづけることができる」など、「グリット」に関わる項目において3.5、6.4ポイントの上昇が見られた。これらの結果は、長田高校のアンケート項目と、遠藤が示す非認知能力の区分を分析の枠組みとして整理・解釈することで、生徒の学習過程における変容として位置付けたものである。

これらの変容は、毎時間「見通し・活動・振り返り」を意図的に設定し、生徒が自身の学習過程や課題を言語化する機会を継続的に設けたことにより、AARサイクルが授業の中で安定的に機能したことと関連していると考えられる。特に、振り返りを「次に何を改善するか」という視点で位置付けたことで、生徒が改善を前提として次の行動を選択しようとする姿勢が推察される。

また、授業実践②では、「アイ・コンパス」を用いて教科書本文の内容理解からプロジェクト活動に至るまでの各学習段階にAARサイクルを明確に位置付けた。その結果、ワークシートの記述や学習活動の観察においても、自身の課題を認識し、他者の意見を取り入れながら試行錯誤を重ねる姿が継続的に確認された。これは、AARサイクルが特定の活動に限定されることなく、単元全体を通じた学習の枠組みとして機能したことを示している。さらに、本プロジェクトが「学校生活をよりよくするための改善提案」という身近で具体的な課題を扱ったことにより、社会参画意識(自律性・自立心)に関わる項目において8.6ポイントと最も大きな上昇が確認された。これは、生徒がプロジェクトを自分事として捉え、自らの考えや行動が学校生活に影響を与え得ることを実感しながら学習に取り組んだ結果であると考えられる。一方で、比率の差の検定では、統計的に有意な差は見られなかった($p>0.05$)。これらの結果は改善傾向を示唆するものの解釈にはサンプルサイズ等の考慮をする必要がある。

以上のことから、授業実践①開始前(9月)から授業実践②終了後(12月)までの学習経験を通して、長田高校で使用されている非認知能力アンケートにおいて一定の変容が確認された。また、その結果を遠藤の非認知能力の区分に基づいて解釈することで、AARサイクルを取り入れたPBL型授業の単元展開が、生徒の「自己理解」、「グリット」、「自律性」といった非認知能力の向上を数量的・質的の両面から支えていたことが示唆される。さらに、こうした学習過程を通して育成された姿は、協力校が大切にしている価値観である「五常の教え」に通じるものであり、本実践が協力校の目指す目標の実現にも寄与し得ることが確認された。

IX 研究のまとめ

1 本研究を通して明らかになったこと

本研究では、AARサイクルを取り入れたPBL型授業を計画・実施することで、生徒が見通しをもって主体的に学習に取り組む姿が確認された。提案内容を自ら決定し、学習過程を振り返ることを通じて課題や改善点を明確にしながら学習を進め、「自己理解」、「グリット」、「協調性・協同性」といった非認知能力の向上につながる事が分かった。

また、伝える相手を具体的に想定した言語活動を設定したことにより、生徒は英語表現や構成を工夫しようとする姿を示し、学習内容を自分事として捉えながら英語科の目標とする資質・能力の高まりが見られた。

さらに、「アイ・コンパス」を活用することで、PBL型授業におけるプロジェクトの設定やAARサイクル、非認知能力が伸長する学習場面を一体的に整理・可視化することが可能となった。その結果、授業展開や非認知能力を発揮している生徒の姿を見取る場面について教員間で共通理解を図りやすくなった。教員からは、「成果物のみを評価するのではなく、生徒が活動する様子や試行錯誤の過程に目を向けるようになった」という声も聞かれた。共通認識のもと、非認知能力の伸長を承認することができるようになった点も、本研究を通して明らかになった成果である。

2 英語科の授業改善に関する示唆

本研究の成果から、高校英語科の授業改善に関して、いくつかの示唆が得られた。

一つ目は、言語活動に必然性をもたせるためには、学習内容を実社会や生徒の身近な課題と結び付けたプロジェクト設定が有効であるという点である。プロジェクトを通して、生徒が「何を伝えるのか」「なぜ伝えるのか」を自ら考えることで、英語表現の選択や調整が学習者主体で行われるようになる。

二つ目は、「振り返り」を単なる感想に終わらせず、次の行動につなげるための手立てとして、AARサイクルを明示的に授業に取り入れることの有効性である。教科書本文の内容理解や発表活動においても、理解・表現・振り返りを往還させる単元展開は、生徒の理解を深め、学習の質を高めていた。

このような授業展開は、「話す」「書く」といった発信型の言語活動において、生徒が内容と表現を往還しながら英語を運用する力を育成する点でも有効であり、高校英語科における言語活動の質的転換につながる可能性を示している。

3 本研究の課題と今後の展望

本研究を通していくつかの課題も明らかになった。

一点目は、教科書本文の内容によっては、PBL型授業のプロジェクトとして設定しにくい題材があることである。本文の性質によっては、生徒が課題を自分事として捉えにくく、実社会や身近な課題と結び付けるために、教員側により一層の工夫が求められる。すべての単元に一律にPBL型授業を導入するのではなく、題材の特性に応じて柔軟に適用の可否を判断し、効果的な単元を精選していく必要がある。

二点目は、AARサイクルを取り入れたPBL型授業の単元展開には、一定の学習時間の確保が求められる点である。見通しをもって活動し、振り返りを通して次の行動へとつなげる学習を保障するためには、教材や活動内容の精選、単元全体の時間配分の工夫が不可欠である。今後は、限られた授業時数の中でもAARサイクルを効果的に機能させるための指導方法や授業構成について、「アイ・コンパス」を活用し、更なる検討が求められる。

<引用文献>

- ¹ 遠藤利彦(2022) 「「非認知能力」なるものの発達と教育」『発達』 170号 pp.2-8 ミネルヴァ書房
- ² 文部科学省(2017・2018) 『学習指導要領解説総則編』(平成29・30年告示)
- ³ 中央教育審議会(2025) 『論点整理』学びに向かう力、人間性等の今後の整理イメージ(令和7年9月)
- ⁴ 文部科学省(2018) 高等学校学習指導要領(平成30年告示) 外国語編
- ⁵ 中山芳一(2023) 『教師のための「非認知能力」の育て方』 明治図書

<参考文献>

- 遠藤利彦(2022) 「「非認知能力」なるものの発達と教育」『発達』 170号 pp.2-8 ミネルヴァ書房
- 小塩真司(2021) 『非認知能力ー概念・測定と教育の可能性ー』 北大路書房
- 小塩真司(2025) 『非認知能力の発達ー生涯にわたる変化と影響ー』 北大路書房
- 白井 俊(2025) 『世界の教育はどこに向かうか 能力・探究・ウェルビーイング』 中公新書
- 鈴木雅之(2025) 「社会情動的コンピテンシー(非認知能力)に着目した子どもの心と学びをつなぐ学校教育のアプローチ」 令和7年度関東地区教育研究所連盟第96回研究発表大会(2025年11月7日)講演資料
- 兵庫県立長田高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業
「非認知能力の調査(大阪大学社会的能力研究チームとの共同研究)」
https://www.hyogo-c.ed.jp/~nagata-hs/pages/12_SSH/SSH/
- ヘックマン, J. J. 古草秀子(訳)(2015) 『幼児教育の経済学』 東洋経済新報社

<担当指導主事>

鈴木 崇元 飯嶋 肇 新井 裕之 千本木 淳